

カナリヤの詩

CANTUS CANARIARUM

第 127 号
2006 年 3 月 11 日

目 次

- 2 p ~ 麻原さんの「訴訟能力」
- 4 p ~ 手記－弟子のため？
- 6 p 三女の大学あて訴訟の判決
- 7 p 手記－雑誌『創』のアーチャーリーインタビューを読んで
- 8 p ~ 手記－デーヴァダッタは本当に極悪人だったか
- 11 p 資料－2006 年「新五根五力修行」
- 12 p 窓口－狂ってしまう？「最終解脱者」って何？

慰霊碑 第2サティアン跡地



2005/12/11 14:00:02

動揺→逃避願望→奇行、 松本鑑定の全容が明らかに

オウム真理教の松本智津夫被告（50）（1審・死刑）について実施された精神科医・西山詮医師の鑑定書の全容が21日、明らかになった。

東京高裁に提出された鑑定書を同被告の弁護人が公開した。西山鑑定は、松本被告の言動から、精神状況を3期に分けて詳細に検討。幹部被告の「裏切り」で激しく動揺した後、裁判からの逃避願望から空想話や奇行を繰り返し、最終的に沈黙に至ったとし、「訴訟能力はある」と結論づけている。

◆動揺◆ 鑑定によると、松本被告に変化が生じたのは1996年10月の教団元幹部・井上嘉浩被告（36）（2審・死刑、上告中）の証人尋問。松本被告は、自分に不利な証言をする井上被告への尋問を中止させようとしたが失敗。この日、拘置所に戻った松本被告は、「おれの弟子は…」と泣き叫び、「くそー」と叫びながらチーズを独房内の壁に投げつけ、朝まで弟子の名前を挙げる独り言が断続的に続いた。

西山鑑定は、「裁判上の危機に直面して現れた興奮状態」と指摘。「精神病的要素はなく、強い幻滅や怒りによるもので、利害を熟慮している」と判断した。

◆空想と作話◆ 動揺期を経た松本被告は97年3月ごろから、空想話をしたり、独り言を繰り返したりするようになった。拘置所職員に「私の人生に幕を閉じたい。青酸カリを下さい」「心臓が止まっています。止まっても生きているんです」などと語り、手づかみで食事をしたり、尿を飲んだりする奇行もあった。

西山鑑定は、「自分の公判では不規則発言を繰り返すが、元弟子の公判での証言は多弁。立場によって使い分けている」と指摘し、空想話や独り言は、精神病の兆候である妄想ではないと判断した。

◆沈黙◆ 97年7月以降は、独房内での独り言以外には、ほとんど言葉を発しなくなり、01年3月からは失禁でオムツを常用するようになった。それでも04年2月27日、東京地裁で死刑判決を言い渡された日には、拘置所に帰った後、「なぜなんだ、ちくしょう」と叫んだり、夜間に布団の中で「うん、うん」とうなったり、笑い声を発したりした。

また、04年10月の運動中には、野球の投球動作を3回行い、「甲子園の優勝投手だ」と話した。

西山鑑定は最近の松本被告について、会話などは自発的に行うことは無いのに、食事などは介助をほとんど受けず自分でしていることに着目。「意思発動に偏りがあるのは不自然で、沈黙は裁判からの逃避願望で説明できる。黙秘で戦うのが96年以降の被告の決心」と結論づけた。

(読売新聞2006. 2. 21より)

弟子のため？

麻原氏は死刑になることを恐れているのでしょうか？それとも弟子たちのために涅槃に入らないのでしょうか？

麻原氏の裁判の様子は、アーナンダさんが最初証言したとき、麻原氏はアーナンダさんのことを「高いステージに達した成就者だから失礼のないように」みたいなことを言っておだてて自分に不利なことを言わせないようにしていたが、それが通用せず、アーナンダさんがどんどん不利になるようなことを話すので、その後の裁判ではアーナンダさんのことを罵倒したり、脅したりしてました。ずいぶんコロコロ変わって滑稽に思いました。罵倒や脅しは他の弟子のときにも見られました。

また、最初は責任は自分が全部背負いますみたいなカッコいいこと言っていたんですが、その後は、弟子たちに責任をなすりつけるような発言に変わっていきしました。それも通用しないとわかると、今度は不規則発言で裁判を妨害し、それも無駄だとわかると廃人をよそおいました。

なぜここまでして死刑をまぬがれようとするのでしょうか？ 仏教はもともと死への不安、恐怖を取り除くことを目的としていると思います。死は楽しみの瞬間、死ぬのを楽しみに待つくらいの意識状態になることを目指していると思うんです。病多き苦しみ多き肉体からの離脱を切望するくらいにならないといけないんだと思います。だから自殺する仏教徒が出てきて、問題になったくらいです。

こういう意識状態になっているのであれば、池田小学校の児童8人を殺害した宅間守氏のように高裁への控訴を自分で取り下げ、すぐに死刑執行するよう申し出るはずです。それで宅間氏の場合、死刑確定から1年で執行されました。（宅間氏が仏教的悟りの境地にあったと言っているわけではありません、すぐに死刑になるよう本人が望んだという例としてあげているだけです）

麻原氏の場合、裁判での奇行、拘置所で糞尿垂れ流しの状態までして長く生きようとするのは死刑が怖いからでしょうか、それとも弟子たちのためなのでしょう？弟子たちのためだとしても、訴訟能力なしと判断されて公判が中止になっても、帰れるわけではないし、ずうっと精神異常を演じなくてはなりません。それでは弟子たちに法を説くこともできないし、指導もできません。

でも生きていれば弟子たちにエネルギーを送ることはできるのでしょうか？でも裁判の奇行、拘置所での廃人状態で失望した弟子たちもいるのではないのでしょうか？今後のアーレフでの布教にも大きなマイナスイメージになっていると思います。

地下鉄サリン事件の実行犯の豊田亨氏は、麻原氏が裁判で地下鉄サリン事件の宗教的意義を話さなかったので失望したと証言していますが、麻原氏が裁判で宗教的意義を説明し、いさぎよく死刑判決を受け入れていたら、信仰を捨てなかった弟子たちもいたのではないのでしょうか？となると麻原氏は弟子たちのためではなく、単に死刑を免れたいから悪あがきをしているということになるのでしょうか？

元 サ マ ナ

松本被告の三女の入学不許可、 大学に賠償命令 東京地裁

2006年2月20日朝日新聞より

> 「出生による差別で憲法違反だ」と、大学側に慰謝料350万円の支払いを求めた訴訟の判決が20日、東京地裁であった。野山宏裁判長は「不許可は違法」として、学校法人和光学園に30万円の支払いを命令

まず、「私立大学であっても、教育事務を行う際は憲法の諸規定の趣旨を尊重する義務を負う」と指摘。合格後の入学不許可は、慎重に事実関係を調べ、真にやむを得ない事情がある場合を除いて違法となるとの判断基準を示した。

そのうえで、和光大の対応について「教団に詳しいという人物から事情を聴いた以外、三女の生活の実情をほとんど調査していない」と指摘。実際に高校・予備校通学やアルバイトでも重大な問題は生じていなかったとし、「入学させた場合、現実的な危険がどれだけあるか慎重に調べる態度を欠き、三女が教団と深い関係があると安易に判断した」と認定。不許可は違法と結論づけた。

三女は04年春、別の首都圏の私立大にも入学を拒否されたが、東京地裁が学生としての地位の保全を認め、大学側も司法判断を受け入れたため、現在はこの大学に通学している。

和光大学の話 今回出された判決については、厳粛に受け止めます。

以 上

雑誌『創』のアーチャリーのインタビューを読んで

雑誌『創』2月号にアーチャリーのインタビューが載っていました。以前、週刊誌にカナダへ豪遊旅行したと書かれ、カナダには行ったけど豪遊なんかしてないと、週刊誌の記述は事実でないと裁判で訴え、認められたことがありますが、インタビューでもアルバイトして貯めたお金でカーリーと2人だけでカナダへ行ったと答えていました。

またアルバイトしても麻原の子供という理由ですぐクビになるとも書いてありました。大学生活については、最初いじめにあうのではないかと心配していたそうなのですが、今の若い子はサリン事件後のオウム報道とかに毒されてなくて偏見がなく、すぐ友達もできたと答えていました。

なんか麻原の子供というだけで子供には何の罪もないのに差別されているかわいそうな子というのをアピールしているような、世間の同情を買うような「かわいそキャラ」を演じているようにも見えます。

しかし、大学の学費はどこから出ているのか？教団からの金ではないのか？そういうことはいっさい触れていませんでした。あと、形式上脱会しただけのような元信者のおつきの人といっしょに生活しているのはどういうことなのでしょう？

いくら、「かわいそキャラ」を演じてても彼女の教団にいた頃の傲慢、横暴な態度を知っている元サマナからみれば笑ってしまいます。聞いた話では、アーチャリーのおつきの人が彼女の髪の毛をひっぱって、ひきずりまわし、髪の毛がぬけてしまったらしいです。想像ですが、アーチャリーの横暴な態度に我慢できなくなってやってしまのではないのでしょうか？麻原氏の家族の世話係のサマナは、かなりアーチャリーの横暴な態度に悩まされていたというような話を聞いたことがあるからです。

また反上祐派の黒幕はアーチャリーではないかと推測しています。そうでなければ、反上祐派のウッタマー、アッサージといった正悟師クラスの連中が正大師の上祐氏に対して強気な態度で批判などできないはずだからです。私はアーチャリーの横暴な態度で不愉快な思いをしたことがあるので、彼女が差別、偏見を受けて不利益を受けていることに、いい気味だと感じてしまう部分もあるのですが、まあ、彼女は小さい頃からの環境によって傲慢になってしまったとも言えると思うので、そういう意味ではかわいそうと言えるのかもしれない。

そのへんを直すためにもアルバイトしたり大学に行ったりして世間と接する機会を持つのはいいと思うけど、でもおつきの人と生活するのはなんとかならないものですかね？

元 サ マ ナ

デーヴァダッタは 本当に極悪人だったのか

現在、アーレフでは上祐派と反上祐派とで対立しているようですが、反上祐派は上祐氏のことを仏教教団の分裂を図った極悪人のデーヴァダッタにたとえて非難しているそうです。

しかしデーヴァダッタについてのよく知られた極悪人というイメージは間違いではないかという説もあるようです。デーヴァダッタという人物が本当に仏典に出てくるような悪人だったのか、またそうでなかったとしたらどうして悪役とされなければならなかったのでしょうか？

デーヴァダッタについて本には
「さて、かれは仏典において、つねに極悪非道の人物として登場する。気の毒なほど損な役まわりを演じている。」

（「インド仏教文化入門」阿部慈園著 p 54）

どのような話かというと

「マガダ国のアジャータサットウ王子に取り入り、父王ビンビサーラの殺害を教唆したという伝説。 一人、二人、四人、八人、十六人の男に弓や剣を持たせて、ブッタを殺させようとした伝説。 さかりのついた象をけしかけて、ブッタを死に至らしめようとした話。 さらに、ヤソーダラー妃を襲って辱めようとした話（ただし、妃とは三十歳ほど離れていたからおそらく事実ではないであろう）」

（同書 p 54）

これらの話は本当なのだろうか？ 阿部慈園氏はこう言っている。

「かれははたして100パーセント悪人だったのであろうか？ 最近の研究によれば、これらのデーヴァダッタにまつわる伝承は、あまりにも極端で、そのほとんどは後代に作られたものであるという。」 （同書 p 54）

また、ひろさちや氏も同じように、

「歴史というものは、常に勝者によって書かれるものです。歴史の表面から消え去った敗者は、勝者によって書かれる歴史の中で、勝者の悪意によって歪曲されて描かれます。そして、悲しいことに、その歪曲に抗議できないのです。もっとも、仏教の歴史においては、“勝者・敗者”といった言葉は不適切でしょう。それなら、“主流派・反主流派”と表現を改めましょう。仏教の歴史における主流派は、釈迦の入滅といった時点で最長老であったマハーカーシュヤパです。そして、そのマハーカーシュヤパに対抗したと思われる人物が、デーヴァダッターでありました。気の毒なことにデーヴァダッタは、主流派が綴った歴史の中で、釈迦を殺して仏教教団を乗っ取ろうとした悪人、仏敵とされています。」

(「釈迦物語」ひろさちや著 p 222)

と言っています。

中村元氏は、なぜ仏典においてデーヴァダッタに病的なほどの憎悪が成立したのかを3段階に分けて説明している。

「最初の仏教、すなわちゴータマ・ブッダの生存時、または歿後まもなくには、修行を完成した人はみな〈ブッダ〉と呼ばれていた。多数のブッダがいた。〈ブッダ〉は複数である。ブッダはサーキヤムニ一人ではなかった。そうして仏教の代表者もはっきりしていなかった。ジャイナ教徒が伝えた古典『聖仙のことば』によると、当時の若干の修行者たちのあいだではサーリブッダが代表者と見なされていたことさえもあった。デーヴァダッタもこのような〈ブッダ〉の一人であった。

ただデーヴァダッタとゴータマ・ブッダとのあいだにはなにかしら、いさかいがあったらしい。思想の面でも見解の相違があったらしい。一般に伝えられているところでは、デーヴァダッタは厳格な戒律を実践し、極端に禁欲的な生活を要求したのに対して、サーキヤムニの教団では戒律の実践を比較的ゆるやかに解していた。いずれにしてもこの段階では、仏教の指導者(ブッダ)は複数であり、そのなかのどれかが異端者であるということではなく、いわんやどれかが悪人であるときめつけられることはなかった。」

(「中村元選集〔決定版〕第14巻 原始仏教の成立」中村元著 p 567)

第二段階として

「(1) ナンダ王朝からマウリア王朝にかけてインド全体が統一されるにつれて、仏教教団も大発展をとげたが、アショーカ王などは教団の分裂を恐れていた。大教団がひとつにまとまるためには、シンボルがなければならない。ゴータマ・ブッダのすがたは急速に神格化・巨大化されるようになった。仏教は〈仏教〉というよりも〈釈尊教〉とでも呼ばれるべき性格を強くしていった。

(2) 〈釈尊教〉の性格が強まるとともに、他のブッダたちは抹殺されるか、地位を低められるよりほかにしかたがなかった。ブッダとは釈尊のことであり、現在の時期には釈尊という一人の仏しか現れないと考えるようになった。ただ理論的には仏は数多くあってもよいから、それらは過去の仏として想定されるようになった。

(3) サーキヤムニの教団が拡大発展して、仏教の「正統」を主張すると、ブッダたることをめざす他のなかまや教団は、おのずからそこに吸収されることになったが、そこに吸収されないなかまは「異端」となった。デーヴァダッタはサーキヤムニに従わなかったから「異端」となったのであって、ブッダでなかったからではない。最初は「正統」のブッダというものはなかったし、「異端」というものもなかった。権威が一点に集中することによって、「異端」も生じたのであ

る。」（同書 p 568）

第三段階としては、

「仏教の教団がますます発展すると統一の象徴であるサーキヤムニを絶対化し、神格化する必要が起きた。仏教というよりは「釈尊教」の性格が強まり、釈尊を神格化するとなると、かれに対抗したデーヴァダッタは悪人と見なされるようになった。異端者であるというだけの理由で極悪人とされて、デーヴァダッタ極悪人説の伝説がいろいろとつくられるようになったのである。〔そこには、いわば近親憎悪のような感情が支配していた。〕（2）しかし釈尊を拒む仏教徒たちが依然として存続した。それはデーヴァダッタの徒衆である。それは微々たる存在ではあったけれども、西暦四世紀ごろまで存続していた。」（同書 p 569）

と述べている。

オウムの信者はだいたい次のように理解しているのではないのでしょうか？少なくとも私はこのように思っていました。

デーヴァダッタという人は、サーリプuttaも尊敬する優秀な修行者だったのが、たくさんの供養を受けすぎておかしくなり、権力欲から教団を分裂させたというふうな。しかし紹介したような仏教学者の説を読んでまた違った見方ができるようになりました。

しかし、仏教の戒律で不妄語の戒というのがあるのに、仏典に、デーヴァダッタが30歳も年上のヤソダラー妃を襲って辱めようとしたという伝説は、もし事実でないとしたら、とんでもない大嘘をついていることになるのではないだろうか。今残っている仏典というのは、主流派となったマハーカッサパのグループの都合のいいように創作されたものに過ぎないのかもしれない。仏典にはマハーカッサパをもちあげて、他の弟子をおとしめる記述が見られる。

デーヴァダッタの悪人というイメージは事実でないのかもしれない。しかしアーレフでは反上祐派の方が人数が多く、麻原氏を信仰の対象としているという面でこちらが主流派とすると、上祐派は反主流派ということになり、主流派によって魔境と言われ極悪人に仕立てあげられている上祐氏はそういう意味ではデーヴァダッタと共通しているところがあるのかもしれない。

参考文献

中村元『中村元選集〔決定版〕第14巻 原始仏教の成立』春秋社

阿部慈園『インド仏教文化入門』東京書籍

ひろさちや『釈迦物語』大正大学出版会

元 サ マ ナ

《資料》 (1 / 4 ~ 3月末)

2006年初頭から新たな強化月間が始まることになりました。
古くからの信徒さんにとって思い出深い「五根五力セミナー」を
改訂して復活させました。

◆内容 以下の1～4のサイクル（1サイクル3時間）

1. 歌（26曲集） 30分
2. 決意（「欲如意足」「喜・軽安覚支」を交互に） 30分
3. 教学（or 加行） 1時間45分
4. 四無量心の瞑想（ビデオ）
15分

◆参加費：300円

◆表彰と特典

（1）100時間を達成するごとの伝授物 甘露水200ml /
プラーナパワー3個 のいずれか

（2）3ヶ月を通しての上位者に対しての特典

- ①20位以内：正悟師との面談（供物付き）
- ②50位以内：丹5枚
- ③100位以内：進化に名前を掲載して表彰気軽に楽しくセミナーに参加し、帰依の土台を培っていきましょう。

弁護団は6人の精神科医に、30分面会してもらい、意見をもらっている。多数決でもさせたいのだろうか。被告本人の現在状態までの変遷が十分に理解できること、について、まともに反論できるつもりか。

恐れるのは、世論工作により、一部と信者らに、「麻原教祖は弾圧で死刑にされた」などとの声が広がること。「最終芸達者(c青沼陽一郎)」はたいたしたもの。

信者さん、麻原さんが狂ったと考えるとき、「最終解脱者だ」と信じることと矛盾しないのですかあ」ということ。

2月1日面会した秋本波留夫氏は創造出版「AUM科学的記録」を出している。麻原説法や実態をよく観察し、「被害者救済はオウムの後継ぎであるアレフのやるべきことではなく、国のやるべきこと、国の責任である。」と指摘している。

だが、西山詮氏の方が、玄人筋での評価は高いのでしょう。「刑事精神鑑定の実際」新興医学出版社は、鑑定人が刑事鑑定をする基本書。

私、ミニカルト教祖とは、今や直接交渉することもある。魅力ある不思議な人たち。それでも、統合失調症の範疇と人格障害の範疇とが明確に区分できる。

有田芳生さんが2005.11.27日記で触れている詐病事例には注目。1951年の巣鴨プリズンでのこと。

—以下引用—

ところが最近その認識を改めることにした。BC級「戦犯」を取材していて、「あっ」とびっくりするケースに出会ったからだ。

時代は1951年。場所は巣鴨プリズン。当時、死刑判決が下され、刑が執行されていなかった「戦犯」は2人だけ。そのひとりである元軍医大尉は、判決が下されてから精神的な「異常」をきたした。

会話はいっさいなし。排泄物は垂れ流し、眼はうつろでよだれを流している。担当者が床にうつぶせになった彼の排泄物を拭き、起こしあげて椅子に座らせても、足は伸ばしたままで、まるで関節が外れているようだった。

米軍の精神科専門医や松沢病院で何度も鑑定を行うのだが、いずれも「精神異常」との結論が出される。

ところが元軍医大尉の姉は「詐病」ではなく「正気」だと思っていた。やがて姉が金網越しに接見。口を開くことはなかったが、姉の眼には「装っている」としか思えなかった。

死刑から無期懲役へと減刑が伝えられたあとのことだ。姉は2度目の接見を行う。こんども涙を流すだけで、まったく口を開かなかった。ところがである。翌日になり元軍医大尉は刑務官に丁寧に頭を下げ、「書籍をお貸しください」と小声で語った。まったく「詐病」だったのである。

精神科医が何度も鑑定を行い「異常」と判断していた人物が、じつは正常だった。その理由は「正常」と判断されれば、ただちに刑の執行が行われるという恐怖心からであった。

人間はここまでのことができるのだ。ましてや、と言ってもいいだろう。カルト教祖の麻原彰晃＝松本智津夫被告なら、「異常」を演じることが可能ではないのか。そんな趣旨の話をした。

—以上引用—

発行 カナリヤの会

〒242-0021

神奈川県大和市中心 2-1-15 パークロード大和ビル2階

大和法律事務所 窓口 滝本太郎 気付

電話 046-263-0130 ファックス 046-263-0375 takitaro@yha.att.ne.jp

横浜銀行大和支店 普通 1343078 カナリヤの会 滝本太郎